

工夫を盛り込んだ動画や独自の指導体制で実現した丁寧な個別指導で、質の高いフルオンデマンド授業を提供

フルオンデマンド授業の「学術的文章の作成」は、論文などを書く際に必要な文章の書き方の基本を学ぶ授業だ。グローバルエデュケーションセンター(GEC)のクォーター科目として設置され、2019 年度は全 3 クォーターで約 5,000 人が学んだ。文章作成をオンデマンドで指導することは簡単ではないが、動画にディスカッションを盛り込んだり、毎回提出する課題文章を個別に指導したりすることで、一方通行になりがちなオンデマンド授業の欠点を克服した豊かな授業が実現できている。



佐渡島 紗織
国際学院 教授

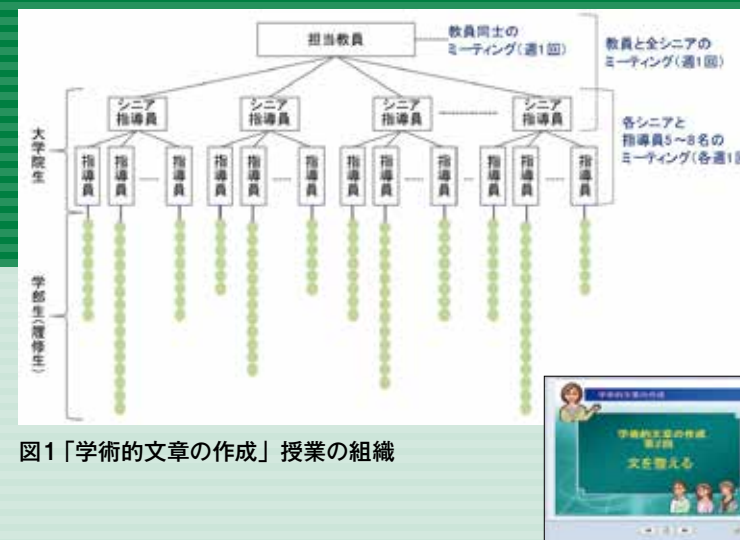


図1「学術的文章の作成」授業の組織



太田 裕子
グローバルエデュケーション
センター 准教授

坂本 麻裕子
グローバルエデュケーション
センター 准教授

外村 江里奈
グローバルエデュケーション
センター 講師

画面の中の登場人物に語らせることでオンデマンドでもディスカッションを実現

「学術的文章の作成」は政経、商、社会科学、人間科学の 4 つの学部の 1 年生の必修科目となっている。大学生にとって、学術的文章の書き方を学ぶことの重要性を示しているとも言えるだろう。「大学 1 年生が学ぶことを狙った授業ですが、実際には 3、4 年生が卒論を書く前に履修することもあり、あらゆる学部、学年の学生が学んでいます。」と佐渡島教授は語る。

この科目は 2009 年度に開講したときからフルオンデマンド授業だが、開講の検討を始めた当初は「オンデマンドでは、文章の書き方を教えられない。」と佐渡島教授は考えていたそう。その理由は、対面の授業では、「この文章は分かりやすいか。」「どう書き直したらもっとよくなるか。」を検討させるディスカッションを取り入れていたが、それをオンデマンドで実施するのは難しく、例文だけを紹介するような一方通行の退屈で浅い内容になってしまうと懸念したからだ。

「その時、教務課やグローバルエデュケーションセンター、当時の遠隔教育センター（現・大学総合研究センター）の方々が全面的なサポートを申し出てくださいまして非常に有り難く思いました。そこでもう一度考えて、オンデマンド動画の中にディスカッションをする学生を登場させられないかと相談しました。」「指人形」も考えたそうだが、最終的にはプロが描いた男女 4 人の大学生（と佐渡島教授）のアニメを登場させて、毎回動画の中でディスカッションをするという形式に落ち着いた。「4 人の大学生」は、優等生タイプや少し個性的なタイプなどキャラクターを設定して、過去の対面授業でのディスカッションを参考に佐渡島教授が台本を書いた。音声は、キャラクターに合う声優を選んで録音。こうして、オンデマンドでありながら疑似的に文章についてあれこれ考える過程を体験できる授業が実現した。

このときに作成した動画を現在まで利用しているが、時代の変化などに合わせて一部は修正しているという。「たとえば、第 1 回では『論文は書き言葉で書きます』と説明していましたが、その後 SNS の普及で『話し言葉で書く』機会も増えてきました。そこで、話し言葉と書き言葉を対比させたりリストを差し込み、よ

り時代に即応した指導をするように変えています。」。

教員→シニア指導員→指導員という独自の体制で、丁寧な個別指導が可能に

さて、「学術的文章の作成」では毎回授業を視聴した後に、履修者はその回の内容を反映させた課題文章を提出する。この文章の提出とその後の個別指導も、授業の「要」と言える重要なポイントだ。1 年間に 5,000 人もの履修者がいるオンデマンド授業できめ細かな個別指導ができるのは、独自の指導体制が確立していることによる。

具体的には、教員が指導員となる大学院生をまず指導・育成し、その大学生が学部生である履修者を指導するという「二階建て」の体制を取っている。さらに、指導員の一部は「シニア指導員」として複数の指導員を束ねる役割をしている。（図 1 参照）

「2009 年の開講当初からこのスタイルです。当初、教員は私一人で、指導員が 16 名でした。授業規模が大きくなるにつれて増員し、現在は教員が 4 名（佐渡島教授以外は、太田裕子准教授、坂本麻裕子准教授、外村江里奈先生）、2019 年度の指導員は 81 名です。」

指導員候補の大学院生は、大学院で「学術的文章の作成とその指導」という科目を履修することが義務付けられている。こちらは対面授業で、オンデマンド授業 8 回分の内容を 15 週間かけて対面でしっかりと学び、履修者の中で優秀な人材だけが指導員になれる。「履修者のうち約 7 割の院生が指導員になります。残念ながら指導員になれない人もいますが、指導員は、提出される文章に評価点をつけるという重責を負うので、慎重に可否を決めています。」

指導員は、すべての研究科から募集しており、一人ひとりの指導員は、修士研究や博士研究の進み具合に応じて希望する人数の履修者を一つのクラスとして担当する。クラス制にしているのは、期を通じて一人の履修者を同じ指導員が見るためだ。「そうすることで、学生ごとの文章の癖や、学び始めからの上達ぶりなどが把握でき、それが指導に反映されるからです。」

指導員によって指導や評価にばらつきが出ないように、シニア指導員ごとに数名の指導員が集まり、毎週 1 回のミーティングで

評価などのすり合わせをしているという。また、すべてのシニア指導員が集まって、各シニア指導員が行ったミーティングでの様子を報告したり、次回授業のポイントを確認しあったりするミーティングも別途毎週行われていて、佐渡島教授や他の教員はこのシニア指導員とのミーティングにのみ出席している。

「指導員のミーティングでは、課題文章の評価について、何がどこまでできていれば何点というのをかなり細かくすり合わせします。実際の文章を例に、ここに何点配点するかを話し合ったり、お互いのコメントを講評し合ったりもします。採点の匙加減は難しいですね。ただ、公平であることは重要ですが、画一的にはしたくないと考えています。大切なことは、履修している一人ひとりの学生の文章作成力が伸びることです。指導員には、履修者が文章を書く自信が少しでも付いて、楽しさを感じられるような指導をしてほしいと願っています。」

学生が自分の書いた文章を振り返る「コメント欄」の設置で双方向性をアップ

オンデマンド授業は、毎週 1 回 Course N@vi を通じて配信している。オンデマンドということで、もちろん、履修する学生は場所や時間を問わず好きなときに授業を視聴できる。視聴後は、画面の指示に従って、その回の授業内容を反映した課題の文章を、Word で作成して Course N@vi から提出。指導員は、担当する学生から提出された文章を読んで、Word のコメント機能なども使ってコメントと点数を付けて、Course N@vi から返却するというのが、各回の流れだ。

オンデマンド授業は、一方通行になりやすい、他の履修者の様子がわからないといった点を指摘されることもあるが、この授業ではそうした弱点を補う工夫もある。まず一つは、書いた文章について自分で振り返るためのコメント欄を設けている点だ。

「オンデマンドでは、こういう意図で書きました、ここが難しかったといったことを指導員に直接説明できないため、指導員から『意図がつかめないうきに、指導が難しい』という声が上がっていました。そこで、開講 3 年目くらいから履修者が自分の書いた文章について自由にメッセージを書けるコメント欄を設けた結

果、より双方向な指導ができるようになりました。」

また、他の履修者がどのような文章を書いているのかを見られるように、シニア指導員が取りまとめている単位ごとに、Course N@vi に「模範文章サイト」を作成。よく書けている課題文章を毎週クラス単位で取り上げて、それに対するコメントや評価点と共に匿名で公開している。「他の人が書いた優秀な文章を読めるのは、学生にとってよい刺激になります。コメントや評価も見られるので、採点基準が公正であることもわかるのではないのでしょうか。」

さらに、指導員が担当するクラスごとに質問の掲示板も設けていて、履修している学生は疑問点などがあれば直接指導員に質問をすることも可能となっている。

「文献を文章に組み込む」をテーマにするなどもう一科目設置することも検討していきたい

場所や時間に縛られず、多くの学生に一齐に指導できるというフルオンデマンド授業のよさを確保しながら、丁寧な個別指導も可能にしたのは、Course N@vi の存在も大きいと佐渡島教授。その Course N@vi が、2020 年度から新しい学習管理システム（新 LMS）に切り替わる。「Course N@vi がなくなることには不安はありますが、新 LMS では動作が今までより速くなると聞いています。同じように使えるまでには少し大変なこともあるかもしれませんが、よい面もあるだろうと期待しています。」

必要に応じて微調整は行うものの、今後も授業の基本的な内容は大きく変えるつもりはないというが、可能であれば別途、新しい科目を設置することは検討していきたいと佐渡島教授。「理由は、クォーター科目で 1 単位しか取れないことが、必修化のネックになっている学部があると聞いているからです。とは言え、今の科目の発展的な内容を取り扱うとなると、それぞれの専門領域によって違いが出てくるので注意が必要です。まだ構想のレベルですが、たとえばさまざまな情報を目的に合わせて解釈、選択、整理し、適切に引用しながら自分の論に組み込んでいくというような内容をテーマにした科目ならすべての学部で役に立てるのではと考えています。」